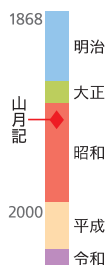


山月記

なかしまあつし
中島敦



1 隴西の李徴は博学才穎、2 天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、7 賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。

いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第した頃の豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために

節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として樂まず、狂悖の性は

よいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上がると、何かわけのわからぬことを叫びつつそのまま下に飛び下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻つてこなかった。付近の山野を搜索しても、なんの手がかりもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史、陳郡の袁儂という者、勅命を奉じて嶺南に使いし、途に商於の地に宿つた。次の朝いまだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁儂は、しかし、供回りの多勢なのを待み、駅吏の言葉を退けて、出発した。残月の光を頼りに林中の草地を通つていった時、はたして一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、



16 帰臥 官を辞して故郷に帰り、静かに暮らすこと。
17 峭刻 厳しく、険しい様子。
18 登第 合格すること。
19 儁才 才能の優れた人。俊才。
20 快々 不満が募る様子。
21 狂悖 異常なまでに道理に背くこと。
22 汝水 河南省より発し、淮河に注ぐ川。
23 監察御史 各地を巡回し、役人の取り締まりに当たった官。
24 陳郡 河南省東部にあった郡。
25 嶺南 広東省・広西壮族自治区の治区の一部。
26 商於 河南省西部の地名。
27 駅吏 宿場の役人。
* 語句
28 潔し 焦燥 駆られる 節を屈する 歯牙にもかけない 自尊心

16

10

5

10

5

あわや袁俊に躍りかかるかと思えたが、たちまち身を翻して、もとの叢に隠れた。叢の中から人間の声で「危ないところだった」と繰り返す音が聞こえた。その声に袁俊は聞き覚えがあった。驚懼のうちにも、彼はとっさに思いあたって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁俊は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかつた李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁俊の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであろう。

22 峻峭 険しく、厳しい様子。

叢の中からは、しばらく返事がなかつた。しのび泣きかと思われるかすかな声時々漏れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である」と。

23 久闊を叙した 無沙汰の挨拶をした。

袁俊は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の聲が答えて言う。自分は今や異類の身となつてゐる。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ずきみに畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まつているからだ。しかし、今、囁らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、かつて君の友李徴であつたこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

24 畏怖嫌厭の情 恐れ、嫌悪する気持ち。
25 愧赧の念 恥ずかしくて赤面する思い。

後で考えれば不思議だったが、その時、袁俊は、この超自然の怪異を、実に素直に受け

入れて、少しも怪しもうとしなかつた。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の傍らに立つて、見えざる声と対談した。都のうわさ、旧友の消息、袁俊が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかつた者どうしの、あの隔てのない語調で、それらが語られた後、袁俊は、李徴がどうして今の身となるに至つたかを尋ねた。叢中の声は次のように語つた。

5

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まつた夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けていくうちに、いつしか道は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走つていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えていった。気がつくと、手先や肘のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映してみると、既に虎となつていた。自分は初め目を信じなかつた。次に、これは夢にちがいないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあつたから。どうしても夢でないと思つたらなかつた時、自分は茫然とした。そうして懼れた。全く、どんなことでも起こり得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになつたのだろう。わからぬ。全く何事も我々にはわ

10

15

*語句
厭う 茫然

は、死んでも死にきれないのだ。

袁俊は部下に命じ、筆を執って叢中の声に従って書き取らせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡^{*}を思わせるものばかりである。しかし、袁俊は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

29 意趣 ここでは、詩に盛り込まれた思い。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身となり果てた今でも、おれは、おれの詩集が長安風流³⁰人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤^{わら}ってくれ。詩人になりそなつて虎になった哀れな男を。（袁俊は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐^{おも}いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

30 長安 唐の都。現在の陝西省西安市。

袁俊はまた下吏に命じてこれを書き取らせた。その詩にいう。

偶 ³¹ 因 ^ニ 狂 ^ニ 疾 ^ニ 成 ^ル 殊 ^ニ 類 ^ト	偶 狂 疾 に 因 つ て 殊 類 と 成 る
災 患 相 仍 ^レ 不 ^レ 可 ^レ 逃 ^ル	災 患 相 仍 つ て 逃 る べ か ら ず
今 日 爪 牙 誰 敢 ^レ 敵 ^セ	今 日 は 爪 牙 誰 か 敢 へ て 敵 せ ん や
当 時 声 跡 共 相 高 ^{カリキ}	当 時 は 声 跡 共 に 相 高 か り き
我 為 ^{ナリテ} 異 物 蓬 茅 下 ^{もとニアレドモ}	我 は 異 物 と 為 り て 蓬 茅 の 下 に あ れ ど も
君 已 ^{ナホニ} 乘 ^{リテ} 輶 氣 勢 豪 ^{ナリ}	君 は 已 に 輶 に 乘 り て 気 勢 豪 な り
此 夕 溪 山 对 ^シ 明 月 ^ニ	此 の 夕 べ 溪 山 明 月 に 対 し
不 成 ^{シテ} 長 嘯 但 成 ^レ 皞	長 嘯 を 成 さ ず し て 但 だ 皞 を 成 す の み

31 〈漢詩の注〉
狂疾 精神の病。
殊類 人間でないもの。
相仍^レ 次々と重なつて。
声跡 世間の名声。
蓬茅 ヨモギとチガヤのこと。雑草の意。
輶 一、二頭の馬に引かせる物見車。当時、官吏が乗用した。

長嘯 声を長く伸ばして詩歌を吟ずること。
皞 獣が短くほえ叫ぶこと。

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖^{はうこう}を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったかわからぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たる³²ことが全然ないでもない。人間であった時、おれは努めて人との交わりを避けた。人々はおれを倨傲³³だ、尊大³³だと言った。実は、それがほとんど羞恥^{*}心に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党³³の鬼才^{*}と言われた自分に、自尊

32 倨傲 おごりたかぶる様子。
33 郷党 村里。ここでは、生まれ故郷の村。

* 語句
高雅 非凡 自嘲
羞恥心 鬼才

心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。

おれは詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、おれは俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。

己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうとせせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった。おれはしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙慙とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これがおれを損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、おれの外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、全く、おれは、おれの持っていた僅かばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とがおれのすべてだったのだ。おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎となり果てた今、おれはようやくそれに気が

ついた。それを思うと、おれは今も胸を灼かれるような悔いを感じる。おれにはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、おれが頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしても、どういふ手段で発表できよう。まして、おれの頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。おれの空費された過去は？ おれはたまたまなくなる。そういう時、おれは、向こうの山の頂の巖に登り、空谷に向かってほえる。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。おれは昨夕も、あそこで月に向かってほえた。誰かにこの苦しみがわかってもらえないかと。しかし、獣どもはおれの声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人おれの気持ちをおかしてくる者はない。ちやうど、人間だった頃、おれの傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。おれの毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間を伝って、どこからか、暁角が哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼らはいまだ號略にいる。もとより、おれの運命については知るはず

34 碌々 平凡な様子。
35 憤悶 いきどおりもたえること。
36 慙慙 恥じて憤ること。

37 暁角 夜明けを告げる角笛。

* 語句
切磋琢磨 俗物
弄する

がない。君が南から帰ったら、おれは既に死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を哀れんで、今後とも道塗に飢凍³⁸することのないように計らっていただけるならば、自分にとつて、恩俸³⁹、これに過ぎたるはない。

38 道塗 道。路頭。

39 恩俸 ひとかたならぬ恩恵。

言い終わって、叢中から慟哭⁴⁰の音が聞こえた。袁もまた涙を浮かべ、欣んで李徴の意に添いたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻って、言った。本当は、まず、このことのほうを先にお願ひすべきだったのだ、おれが人間だったなら、飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮^おとすのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁儻が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に登ったら、こつちを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちに君に起こさせないためであると。

袁儻は叢に向かつて、懇ろ^{*}に別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え

得ざるがごとく悲泣の音が漏れた。袁儻も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。一行が丘の上に着いた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮⁴¹したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

41 咆哮 獣がほえたけること。

5
* 語句
懇ろ

■ 出典 『中島敦全集 第一卷』(一九七六年)

初出 雑誌『文学界』(一九四二年二月)

作者解説

中島敦



明治42 (1909) ~
昭和17 (1942)

年号	歳	事項
明治42	0	東京市四谷区に生まれる。
大正5	7	奈良県郡山男子尋常高等小学校入学。
大正11	13	京城府京城中学校入学。
大正15	17	第一高等学校文科甲類入学。
昭和2	18	肋膜炎で一年間休学。
昭和5	21	東京帝国大学国文科入学。
昭和8	24	同大学卒業後、同大学院進学、横浜高等女学校に赴任。
昭和9	25	「虎狩」が「中央公論」選外佳作となる。
昭和16	32	南洋庁の国語教科書編集書記として、パラオに出発。
昭和17	33	「山月記」「文字禍」を「古譚」として「文学界」に発表。三月、帰国。七月、第一作品集「光と風と夢」、一月、第二作品集「南島譚」刊行。二月四日、喘息の影響により死去。

◆家系と青少年期 一九〇九（明治四二）年、東京市四谷区筆筒町（現東京都新宿区）に生まれる。父母ともに教員で、祖父慶太郎（撫山）、伯父靖、端（斗南）は漢学者。敦一歳の時に母の千代子が離別され、小学校入学までは埼玉県の祖父父母のもとで育てられた。以後、父の勤務地について奈良、浜松、京城（現韓国ソウル）と転々とした。

◆文学への開眼と教師時代 一九二六（大正一五）年、第一高等学校文科甲類に入学し、在学中に肋膜炎を患い、以後持病の喘息に悩まされた。一九三〇（昭和五）年、東京帝国大学国文科に入学。大学時代に永井荷風・谷崎潤一郎、森鷗外らを集中的に読んだ。一九三三（昭和八）年、私立横浜高等女学校の国語・英語教師として赴任。

一方で東京帝国大学の大学院に籍を置いて鷗外を研究テーマとしたが、一九三四（昭和九）年三月に中退した。同年、「虎狩」が「中央公論」懸賞選外佳作となる。教師として勤めながら執筆活動を継続。一九三六（昭和一一）年に執筆された「かめれおん日記」「狼疾記」には当時の教師生活時代の心境が映し出されている。

◆南洋へ 一九四一（昭和一六）年三月、持病の喘息発作の悪化により休職、その治療も目的として、六月に南洋庁の国語教科書編集書記としてパラオに着任した。現地における人々への圧政に心を痛め、南洋の人々を観察したり話を聞いたりすることで時を過ごす。この時期に集めた伝説や民話は、のちに『南島譚』に生かされている。

◆「山月記」と中島敦 日本出国前に、親交のあった小説家深田久弥に預けた原稿のうち、「山月記」と「文字禍」が「古譚」と題して「文学界」昭和一七年二月号に掲載された。自身は三月に帰国した際にこのことを知った。学生時代に成績優秀で、第一高等学校、東京帝国大学から教師、官吏の道を進み、小説家への夢を捨てなかった生涯は、「山月記」の李徴の人生を思わせる。

漢学者の家系で身近に漢籍があったことも多くの作品に生かされている。「山月記」で作家として注目を集め、同年、第一作品集『光と風と夢』、第二作品集『南島譚』を刊行したが、専業作家となつてわずか三か月で、喘息が原因の心臓衰弱により死去した。死後、「名人伝」「弟子」「李陵」が発表された。